学校・保育所のあり方保護者説明会　意見・質疑応答の概要
日時：令和 6 年 10 月 22 日（火）18:30～20:04
場所：湯田庁舎 3F 大会議室
参加者：11 名
出席者：教育長、学務課長、石川代理、髙橋主任、髙橋主査

（越中畑　男性）
　一貫校について。義務教育学校 9 年制と、一貫校の違いについて伺います。
（教育長）
　義務教育学校とは一つの学校で 1 年生から 9 年生まであります。多くの義務教育学校の学びは 1 年生から 4 年生で一区切り、5 年生から 7 年生まで一区切り、8 年生から 9 年生が一区切りということで、その中でカリキュラムを作り変えているということで、学習内容も前後したりする形になるかと思っていますし、大槌でもそういう組編成でやっているかと思います。
　それに対してうちは、あくまでも湯田小学校と湯田中学校が存在しているということになります。その中で、義務教育学校がやっているような形を構築したいと。その理由は、県内の先生方が義務教育学校に全く慣れてなくて、西和賀に来たらそういう制度で一から勉強しなければならないとか、文科省で推奨されているのは、基本的には小学校と中学校の免許を持っていることと言われています。ところが私も教育学部でなくて理学部だったので、中高の免許を持っています、理科の。ところが小学校は持っていないんですよ。そうするとそういう人たちが来にくい状況になってくるということもありまして、それでシステム的には小学校、中学校でちゃんと二つにしておいた方が先生方にとっても負担が少なくなるかなということです。
　職員数は一緒にして、例えば同じ屋根の下の場合は一緒にしたいと思いますし、湯田小・中学校の場合はすぐにくっつけるとはならないので、何らかの形で交流ができるような方法を模索していくということになります。

（中村　男性）
　補足の質問ですけど、この隣接型みたいなパターンということですよね、ハード面で建物は一つ二つ、それと敷地の距離、小中の校舎との、例えば沢内から始まるんでしょうけども、どれぐらい離れたイメージなのか、あまりにも離れてると、今までとほとんど変わらないという印象もあるんですが、その辺のエリアというか、どんなイメージになるのか伺います。
（学務課長）
　沢内地区については、小中を一つの建物の中に、と考えておりますし、そのすぐ近くに保育所があって、学童もあって、という形で敷地内に、コンパクトな中にエリアとして集約されるような形をイメージしております。

湯田地区につきましては、湯田小学校のすぐ近くに保育所ができるというところまでは決まっておりますけれども、中学校とは距離がある形になります。

ただその部分は連携を取る形のスタイルを執らせていただくということで、先ほどの紫波町の例もあるんですけれども、一体型とちょっと離れた形とあるわけですけれども、湯田地区については、最初のスタートは離れてはいますけれども、将来的には一体化を考えています。

（中村　男性）

つまり、沢内の方は最初建物一つの中に校長先生が２人いて、教員も小中それぞれ先生方がいるという解釈ですか。

（学務課長）

沢内地区の方は、イメージとしては校長先生が１人で、副校長先生はそれぞれにいる。校長先生が１人減った分を教諭として回すというか、サポートの体制を執りたいとイメージしているところですし、あとは加配といって、先生方はプラスして見てくれる制度等もありますので、そういった期待もできると思っているところです。

（川尻　男性）

教育長のプレゼンが素晴らしいと思って、これをどんどんいろんなところで話す機会をもっと作っていけば、住民の方にもいろいろ浸透していくんじゃないかとあらためて思いました。

西和賀は今人口減少が進んでいていろいろ大変だと思うんですけれども、今この学校を一つにするとかと話が出ている中で、教育を核にまち作りを進めていくのはすごくいいことだなと思っています。やっぱりそれとセットで、学校の近くで住まいを整備するとかも考えられると思っていて、というのは、不登校のお子さんを持った家族が結構西和賀に遊びに来ているんですよね、中学生の子だったり小学生の子だったり。そういう子たちが１ヶ月とか２ヶ月とか２週間とか来たときに、学校にちょっとでも関わりを持てるような仕組も作っていく、そういう家族にアプローチができると、また新しい動きも付けられるんじゃないかなと思っていて、どこに滞在してもらうかという問題も出てくると思うんですけれども、今、町の小・中学校の課題の中で、集団が固定化してしまい磨きあいや競争意識が乏しい、個人の負担が大きくなるといったところも、流動的な、人が入れ代わり立ち代わり入ってくるような動きも、もしかすると先生方の負担になってくるかもしれませんけれども、慣れだと思うんですよね。そういうふうに入れ代わり立ち代わり人が来るということが当たり前になっていけば、新しい課題が出てくるかもしれませんけれども、一つの町の魅力になるんじゃないかなと思っていて、そういう道も模索できるんじゃないかなと思いました。

（教育長）

例えば総合的な学習という時間があるんですけれども、先ほど説明したとおり、今西和賀の魅力をピックアップしているんです、全部。それを保育所から中学校３年生までダブらないように組織的に作っていけたら、卒業時にはかなり西和賀のことについて体験したり、人に説明できるような形ができるんじゃないかと。今日、校長会議があったんですけれども、

校長からも、やはりそういう形を作れたらいいという話が出てきています。それをまもなく実現しなきゃいけないと思っていますので、校舎が離れたとしても、ちゃんとお互いにやり取りして情報交流していきたいというところはあります。

それから不登校関係の子どもたちも、実は環境が変われば登校できるという子もいまして、それは大事だと。まず１週間とか２週間とか短い時間で来てみて、そして行けるときに学校にちょっと行って、面白かったからまた行きたいとなるようなきっかけ作りは、これも必ず検討しなきゃいけない一つと思っています。あとは町全体で住む場所だとかを考えてもらわなければならないので、それぞれの部署にお願いしながらできるところを頑張りたいなと思っています。

（川尻　女性）

二つ質問があるんですけれども、一つは複式学級の授業のイメージできなくて、１学年毎であれば担任の先生がそれぞれの科目を一斉に教えるイメージがあるんですけれども、学年が２学年に渡ったときに、どう授業を進めるのかと。タブレット学習が普及していることもあって、自習っぽい雰囲気になると想像されるんですけれども、私はの小学校のことを思い返して、結構ディスカッションが多い学校だったので、それが結構面白かったなと思っていて、一つの問題、課題に対して皆で意見を言い合う機会が多かったので、それが面白かったんですけれども、その複式学級のときにどういうふうに授業が進むのかというのを、イメージがあれば教えていただきたいというのが一つです。

もう一つは、図書館をできれば皆さんの交流の場にしたいという話がありましたが、そのとき太田図書室とか銀河ホールの図書室というのはどうされるのか、今の段階でイメージあればと思ってお伺いしました。

（教育長）

複式学級は、実は北上にも学校がありまして、三、四年生が一つの教室に、お互いちょっと離れて机を置いて、そこに１人の先生がこっちで教えて、次はこっちで教えて、その間はこちらが自習というような形になっていました。

ただ、それだとあまり効果がないかなというところあります。一つは先輩の子どもたちが下級生の教えに行くっていうのがある。そうやって下級生を教えるとなれば、それなりに分かっていないと教えられないので、そういうやり取りを同じ教室の中でやるという方法があるし、先生の話よりも上級生の話を子どもが聞くという状況も生まれてくることが多いようです。

ですので、そういう授業の体系のあり方が一つあると思いますし、あと法律的に許されているわけではないですが、免許を持った先生が授業を構築していくわけですが、今支援員を配置しておりますけれども、支援員の協力をいただきながら自習の形を作らないようにする方法があると思っています。授業については、免許を持った先生が作れば、その後実践するのが補助の方でも大丈夫なところがあるということなので、そういうことができればいいと。教室が同じでない方法ももしかするとあるかもしれないというところもあります。

そのときは主になる先生が行き来することになるかと思いますが、そうしないで、やっぱり支援員の協力をいただきながらやっていくという方法もあるかもしれません。

ということを模索をしていきたいんですけれども、私的には2学年の交流を図った方が、成長が他の学校よりも早くなりそうな気がしているところです。

それから図書室の件もお話がありましたが、校舎が一体化したら、おそらく体育館の中にある図書室は閉鎖すると思っていて、それこそ校舎の中の図書室を充実させて、そこに司書をあてがって、日常的に入れるようにする方がいいと思います。

この間五城目に行ったときも、土曜、日曜も図書室を開けていて、朝は8時頃から夕方の7時まで常駐しているというのを見てきたので、そういう方法があると非常にいいと思っているところです。

湯田地区については、保育所と小学校は隣同士と考えているので、小学校の図書室を充実できたらと思います。

なおUホールの下にある図書室については検討中というところです。

（川尻　女性）

部活動のことについてですけど、中学校の部活動の方向性、今のスポーツ少年団というか、そっちの活動と関わっていく内容だと思うんですけど、例えば小学校と中学校が一緒になったときに、小学校のときからスポーツ少年団を見越した活動ができるような練習場所とか施設だったりとか造ってもらえないんですかね。というのは、個人的な話ですけれども、今長男が湯田中学校のテニス部に入っています。湯田中学校は野球部とテニス部しか男子はないので、そのどちらかを選ぶような形になっているんですけれども、そのどちらも選ばなくていいっていう選択肢はもちろんあるんですが、なかなかそれを建設的な理由で選んでいけるような子が多いかというと、現実的にはまだそんなにいないと個人的に思っていて、部活動をさせること自体に私はそこまで力を入れようとは思っていなかったんですけれども、あの子どもたちが頑張っていく姿を見ながら、やっぱり思春期の、特に男子には必要な活動なんだなっていうのを痛感しています。

やっぱり練習場所が少なかったりとか、あとコーチのあり方っていうかお願いの仕方というか、それが悩みの種であって、練習場所とか、あとは練習時間の確保が難しいと思っています。

例えば11月2日が湯田中学校が登校日になっているんですけれども、その日にテニス部の中で勝ち進んだ組の大会がぶつかっていまして、学校主催の大会っていうのが新人戦か中総体だけなんですね。その新人戦でも中総体でもないんですけれども、一応学校が主催してもらっている大会で応勝ち進んでいるんですが、その日は欠席扱いになるっていうことを学校から言われて、もちろんコーチも顧問もつきませんと、出場するかどうかは個人に任せますということで、学校から言われてしまったんですね。出るペアが決まっているので、どうにかできないかということで学校の方に何度かお願いしたんですけれども、学校で関わることについては、自分たちも欠勤になってしまうし、欠席するかどうかを自分達でという感じだったんですよ。もちろんそれは制度的に難しいところだと思ったんですけれども、他の学

校は登校日ではないというのもあって、コーチも監督も来て、もちろんメンバーも来て応援してくれるようなところだったと思うんですけれども、スポ少に任せる部分と、学校としての部活動というところの、その微妙な境目が、まだ移行期間中なのか、どっちともいかないようなところが多くて、子ども達が、せっかくこう強くなろうと言っているときに、その部活動としての学校の体制をどこまで求めたらいいのかというところが難しいと感じています。

なので、例えば練習する場所だったりとか、小学校のときから強くしていって、中学校ではもっとできるようにして、団体戦を例えばどんなに人数が少なくても戦っていけるような環境を整えてあげることが大事だと思っています。

志賀来ドームもあって、雨の日は練習させてもらいたいんですけれども、沢内ジュニアさんが押さえているんですよ、全部。雨が降らなかったら使ってどうぞというような予約の取り方しかできない。テニスに関して言えば練習できるスペースが限られて、冬になると練習できないので、何かサポートがあったら嬉しいと思っています。

（学務課長）

中学校は、部活動指導員を配置させていただいて活動しているわけですけれども、将来的には中学校から部活は切り離されていて、今準備しているんですけれども、町の方で地域スポーツクラブ、全体を統括するところを作って、小中も関係ないんですけれども、湯田、沢内も関係なく、西和賀クラブみたいな形のソフトテニスのクラブがあって、そこでやりたい子はやる。会場の調整とか時間とか指導者とか、そういう調整役の地域スポーツクラブの人がいて運営していただくような形に、今後移行したいということで、その準備をしている段階にあります。

ですので、現時点では移行時期ということで、土日は学校が関わらない活動になったりとか、平日は部活動として学校が関わる活動になったりとか、学校によっても部活をやりたい先生もいるんです。土日も見たいという先生もいますし、土日に先生は付かないという形もありますし、様々模索をしながら調整を図っている段階にありますので、将来的にはそういった全体を統括するような形の地域スポーツクラブができて、そこでやりたい子たちが競技をやっていく。そして運動部だけじゃなくて、例えば文化部とかもできるような形を目指しているところにあります。

（教育長）

スポーツ庁の方では、令和 7 年度までに部活を全部地域に移行すると声をかけられていたので、私達も急いで見てきたんです。それで各中学校の部活動を見ると、比較的若い方がいたと。これはラッキーだなと思って、これまでコーチをしていた方々を指導員にして、学校から少しでも切り離そうと。あとは課長が言ったように、今準備中で、来月発足する予定です、地域スポーツクラブ。そこに文化部というのも、例えば山音だとか、いつかは演劇だとか、いろんなことが関わってきて、放課後の活動は地域で面倒見るというような形にできるかどうかと思います。北上にもサッカーバトミントンのクラブがあって、学校の名前ではないのが中総体に入ってきて、北上中学校は学校で出ているというような状況で、今はどちらも認めているという形です。

あとは沢中と湯田中がいつも合同でチームを作っていますので、イメージ的にはそんなふうにも関わってくるのかなと。そこを他の人がお世話してもらう制度としていく形と思っていますし、この間県で優勝したソフトボール、和賀東中学校と沢内中と江釣子中の三つの合同チームが県大会で優勝したという嬉しいニュースも入ってきましたけれども、そうやって北上の地域スポーツとも交流を図りながら、子供たちが自分でやりたいこととか、楽しみたいことを選択するような形を、今急ピッチでちょっと準備しているところです。

会費の件、施設の件といろいろ課題があるので、そこはこれからクリアしていかなければならないと思っています。

（川尻　男性）

私からは質問ではなく、あらためて小規模校は素晴らしいと感じております。

私自身、隣の北上市の江釣子出身でして、当時私は1クラス40人近くの環境で学んでおりまして、小中学生の頃は周りの自己主張が強い子たちの中に埋もれてしまって、しっかり自分の意見を言うことができずに育ったと思っていまして、大人になってからは人の意見に流されずに自分の意見をしっかり持とうと思ったら、小さいうちからその子に応じた指導をすると、子どもたちも自分の思いを伝えることができるんじゃないかと思っています。

僕も親になって、子どもにとって教育面を考えると、非常に良い環境で勉強できていると感じています。

西和賀の子が最終的に、例えば進学で首都圏の方に行くとなっても自信を持って、田舎から出てきたからって劣等感を感じるのではなくて、自信を持ってこの自然環境の中で育ってきたと。例えば首都圏でバーベキューをするとかなったときに、先頭切って火起こしができるとか、そういった子が1人でも2人でもいると。自信を持ったそういう子がどんどん増えればいいと思います。

（教育長）

小規模校の良さということで、私もこちらに来て、高校の校長先生と3人ほどお会いしているんだけれども、大きい高校で本当に生きているというか、埋もれていないのは生徒会長や応援団長をやる子だと言っていました。あとは深海魚と言っていて、底に沈んで質問もできなくて劣等感を持つ子がほとんどという状況で、小規模がいいと言って皆さん西和賀高校を選んでいるということで、その良さは今後も継続できたらと思います。

それから自信を持つということをすごく大事だと思います。歴史教科書を見ても、中尊寺の記述は最悪で、中央集権の書かれ方をするので、東北で内乱があったので源氏が行って鎮圧したという事実なんですよ。それでは東北人が自信を持てるわけがありません。でも東北には良い歴史がちゃんとあって、情に深くて阿弖流為もこれ以上犠牲者を出したくないから坂上田村麻呂に連れて行かれて、京都では助けてほしいと言ったけれども首を切られて、そして清水舞台の下に墓があると。

そういう苦労した歴史を子ども達が分かったら、俺たちの土地はこんなにすごい場所なのか、こんな人間がいた場所なのかと感動すると思います。これは高橋克彦さんの本にも書い

てあって、東北のことを知らなかったのが悔しくて「炎立つ」を書いて、大河ドラマになったと。

ですから、東北は本当にいいところだということを、私もこの地域で初めて分かったような気がして、東北の歴史をきちんと教えられる西和賀町の教育でありたいと強く思っています。

（中村　男性）

小中一貫になったときに、我々親としては何を、普通の小学校と中学校が別々だったのと、小中一貫になって、どういう良さを期待すればいいのかという、教育長はいろいろな教育現場を見られていると思うので、小中一貫校の良さ、別々だったのと何が違って、どれぐらい楽しみにしたらいいのかというのを聞いてみたいです。

（教育長）

小中一貫校でなくても、地域性をバックアップする学校にしていかなければいけないと思っています。この間、沢内小学校の学校公開があって、そのうち小学校一年生を担当する先生の指導案を見ました。そうしたら生徒の実態という欄があって、入学してきたときに字を読める子とが読めない子が、ひらがなを書ける子と書けない子がいる。ということで、そこで最初の何時間かはすごく苦労して、今ようやくこの時期になって同じ土俵に立てているということでした。保育所が近くにあって小学校もあれば、こういうところまでやろうよっていう話ができる可能性があります。兄弟がいれば、親にとってはそこに来れば全員いるわけですよね。そうしたときに、学校は変わるけれども、保育所の先生方とも小学校に上がった子供の話ができたり情報交換はできると思われますし、私としては小学校、中学校に地元出身者で教育が携わった人を呼び込んで、地域のことがわかる先生を定着させたいと思っているところです。

そういう意味で、岩大の遠藤先生からお電話をもらいまして、西和賀で教育学部の子どもたちに教育実習をさせたいと言っていました。なぜか、今の子ども達は沿線上の学校には行きたがるが、地方の中山間地だとか沿岸の方には行くと、例えば荒れているだとか、山の方はコンビニが無いとかということで、希望しない子が多いと。そうではなくて、山間部でも魅力ある教育をやっているんだということを伝えたくて、生徒を派遣したいというお話をいただいたので、これは絶対に逃してはいけないと思って、これから相談するところです。

そういうふうに大学とも地域が結び付きながら、探究的な時間は先生ではなくて、地域の人たちにおまかせすることができたらと思っています。ですから、自由に学校を行き来できるようなプログラムができたりすれば目処が立つかと思って、さらに毎年プログラムを変えていくことで子供たちと地域の人たちも生き生きとやってもらえるのかと思っています。現在は読書ボランティアが中心だったり、農業関係で田植えだとか稲刈りのときに中心にやってもらっていますが、それらを常態化していくという形が大切と思っています。

（中村　男性）

途切れなくいくということですよね、子供たちがずっと滑らかに。今は途切れているんですか。

（教育長）

途切れているように思います。私も中学校教員のときに、総合的な学習の時間をどうしたらいいんだろうかって悩んで、それは小学校でやってきたということがあったんですよ。何で小学校と中学校が連携しないんだろうということで、でも、する時間がないんですよ、先生方にも。私も部活動で家にいたことは無くて、それが美徳だと思ったけど大きな間違いなんですけれども、そうやってきたところがあったので、まずは取り入れて。全部１回整理したんです、学校と保育所を。それをもってこうなっているんだということが分かったので、きちんとプログラムしたら良い教育ができると思います。